

## 68

## 中島友玄『鍼灸施治姓名』にみる症状と経穴

誌上発表

ヴィグル マティアス

二松学舎大学

中島友玄(1808-1876)は江戸後期~明治初期にかけて岡山県邑久郡で活動した専門医家中島家の第四世にあたる在村医である。26歳の時に京都に遊学し、古医方を吉益北洲、西洋医方を蘭学医小石元瑞と藤林泰祐、産術を緒方順節と清水大学、外科を華岡青洲の門人高階清介に学んだ。帰郷後は地元で開業をした。「配剤」(施薬)「回生」(産術)「鍼灸」の3つの医療活動の他に、薬の販売業や岡山県の邑久郡の牛窓種痘所で種痘も行なった。先端的な医学を学び、複数の診療分野の医師であった友玄が残した京都の遊学や医療活動に関する資料から、幕末における西洋医学の普及や、在村医の臨床医学の現状を伺える。本稿では、中島友玄が残した鍼灸施術関係の7冊の資料のうち、「鍼灸施治姓名録邑久郡西南」(文久3年, 1863), 「鍼灸施治姓名録邑久郡東」(文久3年, 1863), 「鍼灸施治姓名録并諸事留上道郡・御野郡」(文久3年, 1863), 「鍼灸施治姓名録邑久郡北」(文久3年, 1863), 「鍼灸施治姓名録和気郡・磐梨郡・津高郡・児島郡」5冊の内容を分析する。

5冊の形式は同じで、地名ごとに患者の訪問日、患者名、症状、施治穴名が墨書で記録されており、朱筆で謝礼の記述もある。「邑久郡西南」には44村と330患者、「邑久郡東」には20村187患者、「留上道郡・御野郡」には27村72患者、「邑久郡北」には27村121患者、「和気郡・磐梨郡・津高郡・児島郡」には7村12患者が記録されているが、同一人と思われる患者がよく登場するので、実際の患者総数ではない。また村名と患者名の記載による中島友玄の活動範囲(医療圏)の事態を伺えると言えるだろう。さらに患者の症状については一つの症状、複数の症状と症状の記載がなく経穴名しか書いてない患者が記録されているが、一つの症状のある患者が最も多い。どのような症状があって患者が友玄を訪問したかを見ると、痰(66回)、心下痞(38回)、肩痛(37回)、目痛(34回)、腰痛(32回)は最も登場する症状だが、「痛」の症状(肩痛、目痛、腰痛、頭痛など)に苦しむ患者が全体的に最も多かった。

経穴については、経絡説に所属する71穴が記載されているが、71穴名のうち、不容・膈兪の2穴が200回以上、幽門・心兪・肺兪・肝兪の4穴が100回以上、天柱・上膠の2穴が50回以上、他に14穴が10回以上に記載されているが、残りの経穴は10回以下に記載されている。臨床では友玄が数の少ない経穴に頼り鍼灸の施術を行なったことがはっきり分かる。また71穴のうち「兪」の経穴が多く使用された。

「鍼灸施治姓名録」5冊に登場する症状や経穴の使用を江戸時代に刊行された代表的な鍼灸書5点と比較した。比較の対象になった鍼灸書は『鍼灸要歌集』(1695), 『鍼灸拔萃大成』(1695), 『鍼灸重宝記綱目』(1749), 『鍼灸手引草』(1773)である。これらの鍼灸書には理論だけでなく、針の持ち方・刺し方、経穴の選び方、鍼灸で治療ができる症状とその使用すべき経穴など、鍼灸の臨床に関する内容が多く具体的に説明されているので、同時に学ぶべき基本的な臨床知識が説明されていると言えるだろう。

この鍼灸書5点と中島友玄の資料を比較すると、次のことが分かる。一、江戸時代には鍼灸治療が有効とされていた疾患・症状と、中島友玄を訪問した患者の症状がほぼ同じである。「心下痞」だけは鍼灸書に記載されていないが、38人の患者がこの症状を患い友玄の治療を求めた。二、江戸時代の鍼灸書には経穴が多く紹介されているが、当時の臨床では医師が数少ない経穴に頼って鍼灸を施術した。三、江戸時代の鍼灸書と友玄の取穴の差が明らかである。例えば、下血の症状を治療するため友玄が使用する経穴(上膠, 中膠, 次膠)は江戸時代の鍼灸書にすすめられていない。頭痛の場合も友玄が天柱、身柱と肺兪をよく使うが、鍼灸書にはこれらの経穴がすすめられていない。江戸時代の鍼灸書による普及された正統的な知識と、臨床現場で得る知識の差から説明できるだろう。